2013年 冬号

僧　伽

第80号
僧伽編集委員会
〒921-8031
金沢市野町２丁目32-4
徳法寺内
TEL (076) 241－5219
題字　本多　千翠

知るべし、外道の諸有の三昧は、みな見愛我慢の心を離れず、世間の名利恭敬に貪着するがゆえなり

『教行信証』化身土巻

『教行信証』親鸞聖人の主著。教巻・行巻・信巻・証巻・真仏土巻・化身土巻の六巻で構成されている。

発想の転換

徳法寺　杉谷　淨

上の写真は、ペルーのチチカカ湖で、水上生活をしている部族の様子です。水の上での生活には、自分の土地、という概念がありません。草を編んで作った家は、自由に大きさを変えられますから、大きな家に住みたければ作ればいいだけで、誰の許可も必要ありません。ただ大きければ大きい程手入れが大変なので、必要以上に大きな家を作る人は一人もいません。生えている草を刈ってきて自分で作るのですから、材料費も建築費も無料です。彼らに家のローンのことをいっても理解できないでしょう。田んぼや畑はありませんが、湖にはいくらでも魚がいますから、食べるに困りませんし、売った魚で幾分かのお金も手に入りますから、野菜などは買うこともできます。そうやって彼らは昔から生きてきたのです。

彼らのような水上生活者は、実は世界各地にいます。それぞれの国の政府は陸地での定住を求めていますが、そんな不自由な生活を彼らが受け入れるはずもありません。日本では彼らのような水上生活者はいなかったかもしれませんが、一カ所に定住せずに旅をしながら生活をしていた人たちはいました。

現代の日本にも、実はいるのです。路上生活者といわれる人達です。『〇円ハウス』という写真集などで話題になった、建てない建築家・坂口恭平さんは、東京の河川敷に暮らしている彼らの家に惹かれ、実際に自分で家を作ってしまいました。費用はホームセンターで購入した材料費二万六千円です。一人が住むには十分なスペースで、しかも車輪がついていて動きます。地震が来ても大丈夫。壊れても怪我をすることがありません。（詳細は映画「モバイルハウスのつくりかた」を）

私たちはいつの間にか常識に縛られてしまっているのかもしれません。少し視点を変えると、ずっと自由に生きることができるような気がします。

工藤直志

臓器移植というジレンマ

誰にでも必ず死は訪れますが、多くの人はそのことを、できるだけ考えないようにしています。生命保険への加入を嫌がる人が、遺される家族のためとはいえ、自分の死を前提としたことは考えたくないと言うのを聞くと、妙に納得してしまいます。それだけ自分の死を真正面から考えるのは億劫なことかと思います。

ですが、自分が死んだときのことを家族と話そうというキャンペーンが行われています。これは、臓器移植の普及推進を目的としたもので、家族に臓器提供についての自分の意思を伝えておくこと、そして、臓器提供意思表示カードに意思を示しておくことを勧めるものです。

臓器移植とは、何らかの原因でうまく働かなくなった臓器を新しい臓器に置き換えることで命を助けようという治療法です。この新しい臓器は、現在のところは人工的につくることはできませんので、誰かの体から持ってくるしかありません。腎臓や肝臓なら、生きている人に提供してもらうことができます。しかし、健康な人の体を傷つけることになり、できるかぎり避けたほうがよいとされています。となると、亡くなった人の体から取り出すことになります。心臓移植の場合は、脳死状態の人に心臓を提供してもらう必要があります。脳死とは、脳に大きなダメージがあり、脳全体の機能が失われて回復の見込みがなく、そのまま心臓も停止するだろうと診断された状態です。自力で呼吸はできませんが、人工呼吸器によって酸素が送られており、心臓も動いています。そのため、脳死の人の体は、血液がめぐっており、触れると温かさを感じますが、意識はもどりません。遺された家族が、生前に聞いていたことや提供の意思表示から判断して、臓器提供を決断することになります。

臓器移植を普及させるためには、より多くの人が臓器提供の意思を示す必要があります。ですが、臓器の提供は、ドナー（臓器を提供する人）の家族に大きな心理的負担を強います。家族はもしかしたら回復するのではと希望を持ち続けますので、医師から「もう助からない」と告げられても、なかなか受け入れることはできません。前述のように、脳死の場合は一般的な死のイメージとはかなり異なっていますので、なおさら家族が臓器提供を決断することは難しくなります。また、大切な人の最期を静かに迎えようとするときに、臓器提供のことを持ち出されると、家族はこころを掻き乱されるかもしれません。移植のことを考えると、より早いタイミングで死の判定をしたほうがよいのですが、ドナーの家族は簡単に決めることができません。このようなジレンマのなかで臓器移植は行われています。

もし、臓器提供について考える機会がありましたら、臓器を提供するかどうかだけでなく、臓器移植という治療法についても考えて欲しいと思います。一方では人を助けるものであり、他方では死にゆく人とその家族に負担を強いる関係、すなわち一方を追求すれば他方を犠牲にせざるを得ない関係のうえに成立しているということにも目を向けていただきたいと思うのです。

また、臓器移植だけでなく、延命治療や生殖医療など、医療の進展がこれまでの「いのち」のあり方を揺るがせています。こうした事態のなかで、私たちはどう生きて死ぬべきかがあらためて問われているのです。

くどうただし
金沢大学人間社会研究域研究員
一九七六年生まれ
脳死・臓器移植や遺伝子治療など、新しい医学知識や医療技術が社会に与える影響を社会学の立場から考えています。現在は、プロジェクト「自閉症にやさしい社会」のメンバーとして、自閉症や発達障害に関わる問題も研究しています。
ta.kudoh@gmail.com

真宗豆知識

二つの「天親菩薩」

正信偈には「天親菩薩」で始まる行が二か所あることは、お気づきと思います。「造論説」と続く個所と、「論註解」と続く個所です。「論」とは、天親菩薩のお書きになった『浄土論』、「論註」とは、それを曇鸞大師が註釈した『浄土論註』という書物のことを指しています。

つまり、最初の「天親菩薩」は、「天親菩薩は」という意味で、二番目は「天親菩薩の」という意味なのです。

さて、正信偈の後半では、親鸞聖人が影響を受けた七人の仏教者（七高僧）のことが述べられています。天親菩薩はその二番目、曇鸞大師は三番目に当たります。

インドにお生まれになった天親菩薩は、『佛説無量寿経』の内容を独自に解釈されて、『浄土論』をお書きになりました。ですから、この書の正式名は『無量寿経優婆提舎願生偈』といいます。その『浄土論』の註釈書が、『浄土論註』です。先に述べたようにこれは曇鸞大師が著わされたものです。曇鸞大師は中国人です。

親鸞聖人は、七祖の中でも、特にこのお二人を尊敬されておられたようです。天親の「親」と、曇鸞の「鸞」をとって、自らを「親鸞」と名乗られたのです。

さて、浄土論の中に「観彼世界相　勝過三界道」（かの世界の相を観ずるに、三界の道に勝過せり）という言葉があります。「かの浄土のさまを観ずれば、われわれの住む世界をはるかに超えている」という意味です。浄土論註によりますと、曇鸞大師はこの二句を次のように解釈されました。

凡夫人の煩悩成就せる有りて、亦彼の浄土に生ずることを得れば、三界の繋業畢竟じて牽かず。則ち、煩悩を断ぜずして涅槃分を得。（煩悩にみちみちているものでも、かの浄土に生まれることができれば、三界につながれてはなれることのできない業のきずなも、ついにはそのはたらきを失う。つまり、煩悩を断じないまま、しかも涅槃の分を得るのである。）（傍点筆者）

曇鸞大師が、「観彼世界相　勝過三界道」という短い言葉から、どうしてこのような内容を聞きあてられたのか、よくわかりません。しかし、もうお気づきでしょう。正信偈の「不断煩悩得涅槃」はここからきているものです。

涅槃とは、ニルバーナとも言って、煩悩の火がきえた静かな状態のことを言います。つまり修行の結果、人間のあらゆる欲望を消し去った状態のことです。ですから、「煩悩を断じないまま、しかも涅槃の分を得る」というのは、「分」という言葉は挟まっているにしても、矛盾に満ちた言い方なのです。

しかし、曇鸞大師は、彼の浄土に生れることができるならば、特別な修行をしなくても、それは可能であると述べられたのです。

この曇鸞大師の言葉は、よほど聖人に大きな影響を与えたようです。正信偈だけでなく、主著『教行信証』の証の巻に、そのまま引用されています。『証の巻』では、念仏するものが、どのような証（さとり）を得るのかが主要なテーマになっています。その内容は、「煩悩を断ぜずして涅槃の分を得る」ことであると聖人はいただかれたのです。

（彰）

杉谷浄のラジオ案内

一月一日（火）
二月五日（火）
三月五日（火）
四月二日（火）

FM-N1（七十六・三MHz）で午後一時半から一時間放送します。番組名は「生活一番シャトル便　住職のよもやま話」です。再放送は放送日の週の土曜朝六時からです。インターネットでも聞けます。

『心の相談室』

毎月第四土曜日
午後三時～五時
東別院横
「いちょう館」二階

相談料無料

日常生活でのいろいろな悩み、家族のこと、友達のこと、学校のこと、仏事の疑問等を、僧侶がお聞きします。

和讃に学ぶ　第四十一回

徳法寺　杉谷　淨

二つの「みち」

寺のすぐ近くに「野町広小路」という交差点があります。野町にある広小路ということですが、この「広小路」という地名は各地にあるようです。「広くて小さな路」という、なんだか分かるような分からないような名前ですが、交差点に付けられている地名ですから「小さな路が交差して少し広くなっているところ」ということでしょうか。この「路」に対して「道」という漢字もあります。どちらも「みち」なのですが「路」が「小路」と使われるように「狭いみち、裏通り」を表すのに対して「道」は「東海道」などの幹線道路のような「広いみち、大通り」を差します。

親鸞聖人の和讃に仏教をこの二つの「みち」に例えたものがあります。

万行諸善の小路より
本願一実の大道に
帰入しぬれば涅槃の
さとりはすなわち
ひらくなり

これは念仏の教えを「本願一実」として「大道」に例え、念仏以外の仏教の教えを「万行諸善」として「小路」に例えているものです。この和讃に親鸞聖人は、次のような解説を付けています。

「八万四千の路は狭き路なり弥陀の本願は広き道なり、これをたとふなり、この道より法身と申す証を開くなり、狭き路よりは無上覚を証らずと知るべし、本願の道より無上覚に入るべきものと、この世の中において証るなり、正定聚にまことの信心の人は入りぬれば必ず無上覚を証るべきなり、これを滅土といふなり」

念仏以外にも仏教には多くの教えがあります。それを「万行」または「八万四千の法門」と言います。実際にそれ程の流派があるわけではないのですが、仏教の悟りに至るための修行や教えを伝える宗派は日本に限っても数多くありますし、仏教が伝来した世界各地にはさらに多くの宗派があります。親鸞聖人はそれらを一括りにし、自らの力で善行を積んでいく教えとして「諸善」といっています。この「諸善」によって悟りに至る「みち」を「小路」と呼んでいます。狭くても「みち」ですから、悟りに至ることができるのかといえば、親鸞聖人は「証らず」というのです。

ここにある「無上覚」とは涅槃といわれるお釈迦さまが至った悟りのことです。この悟りとは別に、親鸞聖人はここで「証」を「さとり」と読ませています。これは「無上覚」の悟りとは違い「証明する、実証する、明らかにする」という意味です。ですから「本願の道より無上覚に入るべきものと、この世の中において証るなり」は、「この世」で得るとこのできるのは「無上覚」ではなく「念仏によって無上覚に至ることができることを証明する」ということになります。「諸善」によっては、悟りに至るどころか、その「路」を歩んでいけば悟りに至ることを証明することすらできない、というのです。

「弥陀の本願」もしくは「本願」といわれているのが念仏の教えです。この念仏の「みち」が「広き道」であるというのです。この「道」によって開かれる「証」が「法身」といわれる「南無阿弥陀仏」だというのです。「諸善」の「路」が自分できり拓いていく「みち」であるのに対して、「本願」の「道」は如来の方から私たちの方にひかれた「みち」であるということです。そのことをしることこそが「さとり」であるというのです。この「さとり」を得た人を「まことの信心の人」といいます。また「無上覚」のことを、煩悩が滅した世界という意味で「滅土」ともいいます。

親鸞聖人は独創的な仏教観をもっていたことでも知られていますが、この和讃はまさにその一端を表すものです。

真宗人物伝　第二十九回

常徳寺　西山　彰

正信偈の中の曇鸞大師

曇鸞大師については、以前紹介したことがありました。今回、豆知識の欄で曇鸞大師の浄土論註のことを書きましたので、やや違った視点で、もう一度取り上げてみることにしました。

正信偈の後半では、七祖（龍樹・天親・曇鸞・道綽・善導・源信・源空）のことが順番に紹介されています。七祖は、親鸞聖人が影響を受け、尊敬されている方々のことでしたね。

では、大師に関連した部分を「正信偈」の中から拾い上げてみましょう。

「本師曇鸞梁天子　常向鸞処菩薩礼」（梁の天子は、曇鸞大師のことを常に菩薩と礼したてまつられました。）

中国の梁の斉（そう）王が、曇鸞大師のことを鸞菩薩と敬われ、大師のおられる北に向かって常に礼拝しておられたとのことです。大師の高い徳を表すエピソードといえるでしょう。

「三蔵流支授浄教　仙経焚焼帰楽邦」（三蔵流支、浄教を授けしかば、仙経を焚焼して楽邦に帰したまいき）

これも曇鸞大師にまつわる有名な話です。

大師は、陶隠居という道教の権威から長生不死の仙術を学びます。そしてその帰り道、大師は菩提流支三蔵という僧に出会います。彼から仙術より仏法のほうがすぐれていることを説き聞かされた大師は、すぐさま仙経を焼き捨てて、浄土の教えに帰依したといわれています。

「天親菩薩論註解　報土因果顕誓願」（天親菩薩の『論』を註解して、報土の因果、誓願を顕す）

大師は、天親菩薩のお書きになった『浄土論』を註釈して、『浄土論註』を著わされました。ここで出てくる「天親菩薩」は、「天親菩薩の」という意味であることは豆知識の欄でも述べました。これは曇鸞大師のことを述べておられる箇所です。

『浄土論註』は、上・下二巻からなり、大師晩年の作といわれています。天親菩薩の浄土論は、願生偈として知られている偈文と、それを解説した長行の二部構成になっています。曇鸞大師は、上巻で偈文を、下巻で長行を註釈する体裁をとられました。

願生偈は、「世尊我一心」（世尊、我一心に）という一句から始まります。曇鸞大師においては、この天親菩薩の「一心」ということが、教学上のキーワードになりました。

また天親菩薩は、浄土に生まれるために修すべき行として五つの行をお示しになりました。それを、五念門（礼拝門・讃嘆門・作願門・観察門・廻向門）といいます。

大きく見て、曇鸞大師は、「一心」と「五念門」の関係を軸に「浄土論」を註釈されたといえます。すなわち、上巻では、一心ということを明らかにし、その一心の内容は五念門であることを解かれました。さらに下巻では、五念門が一心におさまることを明かされたのです。

「広由本願力回向　為度群生彰一心」（広く本願力の回向に由って、群生を度せんが為に一心を彰（あらわ）す。）

この二句は、天親菩薩のことが述べられていますが、そう解釈されたのは、曇鸞大師です。

「不断煩悩得涅槃」が、『浄土論』『浄土論註』を貫く重要な教えであることは、豆知識の欄で触れましたので、ここでは省略します。

「顕示難行陸路苦　信楽易行水道楽」（難行の陸路が苦しきことを顕示して、易行の水道、楽しきことを信楽せしむ）これは、難行道と易行道のことを述べています。陸地を歩くのは苦しいが、水路を進むのは楽しいというのは、うまい比喩だと思います。

これは、七高僧の第一祖、龍樹菩薩がお使いになられた喩です。つまり仏道には、苦しい行（難行）を行じる道と、易しい行（易行）の二つの法門があるとお示しになったのです。

曇鸞大師は、論註にこの龍樹菩薩の言葉を引用し、天親菩薩の教えはこの易行にあるとされました。そして自らもこの易行道に仏道の基礎をおかれました。

そのほかにも、「往還回向由他力」（往還の回向は、他力に由る）など、大師は、親鸞聖人の教えの根幹となる要素を数々提示しておられます。

このように見てきますと、インド、中国、日本とわたってきた浄土教の流れの結節点に曇鸞大師は位置づけておられたと言えるでしょう。

（彰）

本の紹介

「さがしています」

作　アーサー・ビナード
写真　岡倉禎志
童心社発行
一三〇〇円＋税

アーサー・ビナードさん（四十五歳）はアメリカのミシガン州出身で、一九九〇年に来日し、日本語で詩を書き始めました。二〇〇一年には中原中也賞を受賞し、ラジオ番組にもしばしば出演しています。

九年ほど前に広島の平和記念資料館を訪れた彼は衝撃を受けます。アメリカで彼が学んだ原爆は、戦争を早く終わらせるための正義の武器でした。しかし彼が広島で目にしたのは、原爆のために突然引き裂かれてしまった多くの命の叫びでした。彼は何度も広島に通い、そこに並ぶ遺品達と言葉を交わします。そして、写真家の岡倉禎志（おかくらただし）さんが撮影した十四枚の写真に、彼が聞きとった遺品たちの声を添えて絵本にしたのがこの本です。

この本の中で、ボロボロになった手袋や靴が話してくれています。みんないきなり止まってしまった時間に戸惑い、ふたたび時間が動き出すのを待っているのです。決しておとずれることのない平和だったころの楽しい時間を。

この本は二〇一一年の六月に出版の予定でした。発売を目前にした時、東日本大震災と福島第一原発事故が起きたのです。広島どころではないと思い、一旦は発行を思いとどまったそうです。でも今だからこそ、この絵本が必要ではないのかと考え直し、東京から広島へ転居し、福島にも足しげく通う日々が始まりました。「ヒロシマとフクシマをつなげて語らなくてはヒロシマの意味がなくなり、フクシマの真実も見えない」彼はそう語っています。皆さんもヒロシマの「かたりべ」たちの声を聴いてみてください。

（淨）

各寺のご案内

◆常徳寺

金沢市寺町
五丁目一番二九号
TEL二四一―二六四九

午後二時より
講師　藤原　正洋氏
午後四時より
あざみゆみこさんによる
泉鏡花原作『化鳥（けちょう）』の朗読

◆徳法寺

金沢市野町
二丁目三二―四
TEL二四一―五二一九

◎お講（石坂同信会主催）
毎月二十一日
午後七時半より
講師　三月　杉谷　淨
　　四月　細川　公英

＊一月・二月は天候が悪いのでお休みします。三月は懇親会をいたしますので、午後六時始まりとします。

◎春彼岸
中川学イラスト展
三月十七日（日）から
二十四日（日）まで

◎春彼岸中日及び永代経法要
三月二十日（水・祝）

編集後記

ようやく今年も終わろうとしています。（この新聞が皆さんのお手元に渡るのは、年が明けてからだと思いますが。）

暮れには総選挙があり、自民党が圧勝しました。これで世の中がすこしでもいい方向に進むのでしょうか。私は、あまり期待していません。

ただただ皆様のご健康をお祈りします。

（彰）

編集委員
西山　彰（常徳寺）
杉谷　淨（徳法寺）